

## 創刊の辞

大学の大衆化はますます進んでいる。今や大学・短大への志願率は五〇%を越え、進学率は約四五%に達しているというが、こうした状況下で、早くから大学における教育観の問い直しがさげばれてきた。十八歳人口は一九九二年をピークに急減期を迎え、以後下降して一九九八年には最も減少するといわれている。このような厳しい社会変化を通して大学は変革を余儀なくされ、十年以上も前から高等教育界はサバイバルを展開してきた。その上、一九九一年七月の大学設置基準の改正施行により、教育課程をはじめ教職員と学生との関係、研究と教育の相互関係が厳しく問われ、大学は大きな転換を迫られている。特に、大学の機能においては、従来の研究のみを中心にした大学観から教育をも重視した大学観へと転換していくことが求められているのである。

近年、研究がますます細分化し専門化する一方で、学問の総合化・国際化も進んでいる。しかし大学が真理探求の場であることに変わりはない。われわれ学究の徒に課せられている使命は、日々に思索し、練りあげた論考を明らかにし、世に問うことである。

さて本学の淵源は身延山第十四世善学院日鏡上人の代に求められる。つまり弘治二年（一五五六）、善学院日鏡上人が西谷に「善学院」という仏教の学問所をつくり、興学につとめたことによる。爾来今日に至るまで四四〇有余年を経、一貫して日蓮宗僧侶の育成を旨として僧道教育を施してきたが、このたび平成七年四月、同窓生の永い間の悲願であつた四年制の大学として新たなスタートをした。

大学では、これまで研鑽の成果を発表する場として機関誌『棲神』を刊行してきたが、このたびの四年制大学への転換によって、研究スタッフも増員し、研究の分野も広がっていることから、誌名を『身延論叢』として研究成果を世に問うこととした。本論叢が、号を重ねるにしたがつて、よりよき論争の場となり、深い研鑽の成果発表の場とならんことを祈念して創刊の辞としたい。

平成八年三月

身延山大学仏教学部長 仲 澤 浩 祐